

審査の結果の要旨

氏名 松山 恵

本論は明治初年の東京を題材として、近世江戸から近代東京への移行期における都市史の全体像を明らかにしたものである。従来、東京における近代都市史研究は数多く蓄積されてきたが、明治初年の動向は資料的制約からほとんど解明されてこなかった。本論では既知の資料に加え、新たな資料を精力的に発掘し、これらをもとに先行研究とは異なる視角から当該期の東京の実像を描き出した意欲作である。

序論では、先行研究の批判的レビューを行いつつ、著者の研究視角が明示される。すなわち従来の研究では東京の近代を「西欧の移植」や産業革命に代表される狭義の近代化の文脈のなかで捉えられがちであったが、本論では近世から継承された都市の基層部分の存在形態を重視し、その上に重畳する近代的要素の位置づけを試みている。すなわち都市計画や都市政策の意味づけを江戸・東京という歴史都市の全体像から再考することが企図されている。

本論は9章と付論2章からなり、郭内における首都形成を取り扱った1-4章を第1部、郭外の首都化の域外にあった部分の動向を明らかにした5-9章、旧幕臣屋敷地区の明治期の実態を分析した付論1、2章で構成されている。

第1部首都化では、明治初年において「郭内」「郭外」が設定された事実を明らかにした。この事実は本論ではじめて指摘された新知見である。江戸城および有力藩邸が建ち並んでいた郭内は、維新後直ちに新政府によって収公され、特別な関心をもって遷都および首都化がはかられた。すなわち江戸城には京都から皇居が移され、実質を伴うかたちで皇城が成立し、諸官庁施設および旧公家の移転もほぼこの郭内に限定するかたちで進行した。皇城内の建築施設の実態や明治初年の諸官庁の分布、公家の移転先を解明した先行研究が皆無ななか、本論では首都化の実像をはじめ具体的に明らかにしたとすることができる(第1、2章)。

首都化の局面から捉えた場合、明治5年の銀座煉瓦街計画はまた違った側面をみせることになる。すなわち第3章では、銀座煉瓦街計画を新資料などにもとづいて再考し、単なる西欧の移植だけでなく、郭内の論理、すなわち天皇を頂点とする近代都市創出の一翼を担うべくこの計画は推移し、建築を手段とした公権力の都市に対する介入の事例として定位される。銀座という場所は皇城に近接した郭内における重要な位置にあったことは、上記のような文脈から理解できるのである。さらに第4章では銀座と皇城の間の地区に皇大神宮遥拝殿が建設されたという事実を発掘し、これまた東京の首都化における新政府の宗教政策の一環として捉えることが可能である。

第2部は郭外における都市生活者を主体とする近代移行期の動向を扱った各章からなる。明治初年、旧武家地のいくつかでは「新開町」と呼ばれる開発が民間主導で進められ、盛り場化したものも少なくなかった。ここでは新開町の

全体的動向（第5章）、下谷和泉橋通り一帯の蕎麦屋敷における開発（第6章）、神田連雀町の開発（第8章）などの個別事例研究を通して、近世から近代移行期の混乱期における民間開発の実像をはじめて明らかにした。新開町は郭外に数多く生まれ、それぞれが新たな都市各部の核となりながら、全体として東京を近代へと連続的に推し進める別のファクターとなってゆく。また郭外ではこの時期、地方の産土神を勧請した遙拝所が私有地内で数多く誕生し、東京の求心的構造を別のかたちで強化していくことになる（第7章）。

第9章は旧町人地の状況を明治後期の日本橋における借地人運動を素材として明らかにしたものである。地主と店子の鋭い対立は近世では必ずしも問題にならなかったが、明治後半になると土地の商品化、資本化にともなって、ようやく顕在化していく。本章では従来、法制史の分野でしか扱われなかった借地人運動の実相を当該期の社会的背景を踏まえながら、都市史のテーマとして問題化することに成功した。

以上、本論は明治初年の動乱期における東京の近代化の実像を郭内、郭外の2元構造から捉え直し、単なる西欧移植の近代化にとどまらない、都市の基層部分の内発的展開をも含みこんだ実証的研究であって、従来の近代都市史の水準を格段に推し上げることに貢献した力篇であると評価できる。しかもここで取り上げられた議論は、都市史や建築史の狭い分野にとどまらず、日本の近代そのものを問い直すことにつながる本質的問題であるといえてよい。よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。